

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520144

研究課題名（和文）現代能楽史の地方展開

研究課題名（英文）Research of the contemporary history of Nogaku in the provinces

研究代表者

西村 聡（NISHIMURA SATOSHI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：00131269

研究成果の概要（和文）：戦後の舞台利用の変遷を番組に基づく能楽史年表を作成して明らかにした。また文献資料及び聞き取り調査により、各地の能楽関連施設の沿革や利用実態に関する最近の傾向を把握した。従来の地方能楽史研究には他地域との関係が視野に入っていないことを指摘し、それらを補う多くの資料を発掘した。能楽史研究の成果を同時代の文学作品の成立にどう関わらせるか、という視点で両者の融合のモデルを『歌行燈』論で作り上げた。

研究成果の概要（英文）：I pointed out that I made a history of Nogaku chronological table based on the program and clarified the change of the postwar stage use and grasped a recent tendency about history and the use actual situation of the Nogaku connection institution of each place by documents document and hearing investigation again, and the relations with other areas did not enter the field of vision for a history of conventional district Nogaku study and built up a model of the fusion of both by a Utaandon idea in a viewpoint whether let I found many documents which supplemented them, and the result of the history of Nogau study concern with the establishment of the literary work at the same period how.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：中世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学、能楽

1. 研究開始当初の背景

能楽史研究の対象とする時代は能楽が大成された中世が中心になるのは当然であり、その最大の研究成果として能勢朝次『能楽源

流考』（1938）が挙げられる。これを規範として、近年、対象は近世にも及び表章『喜多流の成立と展開』（1994）に代表される諸業績が積み重ねられてきた。また同氏の提言により、近世能楽史の視野を地方に広げる必要

性も研究者に共有されてきた。とくに地方ごとの史の変遷をたどるだけでなく、一々の現象を全国的な時代の傾向の中で考察する視野の獲得が課題であるとの認識も定着しつつある。

このように能楽史研究の研究動向は、研究対象となる時代が中世から近世へ、地域が中央から地方へと移行し、かつ両者の継承や交流を見比べる方向にあるといえる。この方向の進む先には近代・現代の能楽史があり、そこでも地方からの発想、あるいは地方と中央の交流が視野に収められている必要がある。

幸い『岩波講座能・狂言 I』(1987)は現代までの通史的概観と各時代の問題の提起から成り、近代・現代の能楽史展望を行う基盤は確立されている。そして近代の新聞から能楽に関連する記事を抄出・集成した倉田喜弘『明治の能楽』4冊(1994~1997)、『大正の能楽』(1998)や近代能楽史初期の貴重な証言となる『梅若実日記』7冊(2002~2003)の刊行など資料整備が進んだことにもより、実際に能楽研究者の関心は近代にも広がり始め、「今やもっともホットな研究分野の一つになりつつある」(『能楽研究』30号掲載の「研究展望(平成13年)」)と論評されている。本研究の研究代表者が『金沢能楽会百年の歩み』上下(2000・2001)の編集・執筆を終え、科学研究費補助金の交付を受けて「金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究」(平成13年度~平成15年度)を開始したのはこの「研究展望」が対象とした平成13年であった。

このように能楽史研究における「近代」は、今や最も注目を集める分野となったが、どの時代においても、まずは「中央」が研究対象となり、やがて「地方」へ視野が広がるという流れが自然である。ところが「近代」の場合は東京という「中央」が研究の主対象となる段階を未だ脱していない、「地方」を視野に入れることが意識されていない、ように見受けられる。

しかし、金沢能楽会の百年の歩みを追跡した、研究代表者による上記の2研究の成果として、「地方」の能楽史には「中央」のそれと異なる独自の展開があるというだけでなく、「地方」能楽界から出た人々が「中央」能楽界の中核となり、家元やそれに準ずる立場で「近代」能楽史の主流を形成した事実や、逆に「中央」能楽界との交流が「地方」能楽界を刺激し、復興・隆盛に貢献した事実が次第に明らかになった。平成16年度から3年間、科学研究費補助金の交付を受けて実施した「近代能楽史の地方展開」でも、葛野流大鼓方飯島家における芸の継承と金沢能楽会の存続・発展が、東京や他地方との交流を通して実現されてゆく過程を追跡し、『大鼓役者の家と芸—金沢・飯島家十代の歴史—』(共

著。2005)の形に表現できたことで、「近代」能楽史を精細に、ダイナミックにとらえるには、こうした「地方」からの視点、発想が欠かせないという考えを強くした。そして『金沢能楽会百年の歩み』上下や『大鼓役者の家と芸』が考察・記述の範囲を平成の現代までとし、金沢に限っては現代能楽史をすでに展望し、諸問題を把握していること、「近代農学史の地方展開」の研究で収集した資料には現代分を少なからず含むこと(特に地方史記述は近代・現代を一連のものとして収集している)、伝統芸能の奨励保護や普及振興という「現代」的課題は早く「近代」にも議論が盛んであり、これまでの研究成果が活用できること、などの理由によって「近代能楽史の地方展開」の研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

平成18年度までの「近代能楽史の地方展開」の研究成果を踏まえ、能楽史研究の対象を近代から現代に広げ、その地方展開の実質を解明する方向で発展させることを目的とした。

近代における能楽の保護、後継者の育成という課題が、その後どう克服され、現代的な変容を遂げたか、新たな現代的課題とは何かを、近代研究の成果を生かして、また能楽界・学会の時々々の動向を確認しながら、現代研究に結実させること、能楽史研究の基本資料である番組の収集に努め、番組掲載資料の体系的な把握を進めて、催事の地域的な偏りとその変化を追跡すること、近代能楽史の通史的展望を地方、また中央と地方の視点から実現するために、地方自治体史における能楽関連記述の収集と整理を行い、これらの資料に基づく近代能楽史年表の作成に到達すること、地方公共の能楽関連施設を訪問して、その沿革や利用実態、普及・振興の具体策などを調査し、地方自治体史の能楽記述の内容を検証すると共に、近代能楽史研究の方法を確立するための分析を行うこと、調査の対象を施設や施策等、文献以外にも拡大し、さらに伝統文化の継承と保存、地域振興などの研究も視野に入れることで、総合的な能楽史研究の在り方を問い直す意義を明確にすること、などを目指した。

3. 研究の方法

近代能楽史・地方能楽史に関する研究文献の収集と分析を行い、従来、どのような研究方法が適用されてきたか、そういう成果が上っているか、何が今後の課題かを研究史的に明らかにすることを目指し、各種能楽雑誌・学会誌、『国文学年鑑』等を情報源とした。具体的には地方能楽史の先駆的業績として

日置謙『石川県史』を取り上げ、その範囲が近代の途中までであり、近世部分に関して江戸の藩邸での催事が視野に入っていないことを指摘し、どの時代であれ、地方能楽史を完結させるには、たとえば加賀藩時代なら江戸や京都への目配りが欠かせないことを明確にした。現代以外の時代に関する、また作品研究に関する研究や講座等の機会にも、その地域の地方自治体史に基づき、絶えず地域の能楽史年表を作成することに努めた。

能楽雑誌の収集に努め、その地方情報欄の体系的整理を進めることを目指した。とくに戦後間もない頃に刊行された能楽雑誌、『能』の記事及び番組情報欄の記載をもとに、番組による戦後能楽史年表を作成した。この年表により、戦後の能楽復興が全国各地でどのように進化したかが明確に把握されるようになった。

能楽史の基本資料である番組の収集に努め、戦後の「白山比咩神社奉願謡番組」（五葉会）及び明治維新前後の番組10点を入手した。近現代能楽史の地方展開の後をたどる有益な史料と考えられる。

文献資料だけでなく、地方公共の能楽関連施設や舞台のある神社等を訪問し、その沿革や施設利用の実態について聞き取り調査、舞台の変遷の調査を各地で行った。とくに最近の数年に少子高齢化の影響が顕著となり、施設の利用が減少している事実がどこでもはっきりと把握された。

4. 研究成果

まず現代能楽史年表の作成に到達するという点では、「雑誌『能』掲載番組による能楽史年表（昭和22年～26年分）」（全72頁）を作成し、「近代能楽史の地方展開」（平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）（2008）に掲載した。これによって、戦後の能楽復興が各地でどのように進化したかが明確に把握されるようになった。戦災で各地の能楽堂・能舞台の多くが消失し、たとえば東京での催しは、染井能楽堂や多摩川能楽堂など数カ所に集中していたが、水道橋の宝生能楽堂など流儀の舞台が急速に再建されるさまが見取れるし、地方では名古屋のように商工会議所や松坂屋ホールでの特設舞台でしのご時期が長く続くこと、京都・大阪の盛況ぶり、学校の教室・講堂や神社仏閣を利用した大衆化の地方拡散の傾向も顕著である。この作業によって、わずか数年の間でも能楽界の状況は劇的に変化することが実感された。大きな時代の変化を迫ることも必要だが、10年も経過すれば能楽師の顔ぶれは相当変わり、舞台も老朽化が進む一方、新たな中核施設が出現する。沿革を調査した横浜能楽堂や宮越記念

久良岐能舞台は建設地を移転しながら再生する事例として注目に値する。地方展開の事例としては、「シンポジウム：金沢が育んだ加賀宝生の魅力—無形文化遺産の継承を考える」の中で、昭和25年に行われた金沢市による「加賀宝生」の記念文化財指定を、加賀宝生の伝統と戦後能楽史の状況の縦横に交差する顕著な事例として分析した。なお、シンポジウムの成果は『金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書』第1集に公開している。

次に従来の地方能楽史研究に対する検証としては、地方能楽史研究の先駆的業績の代表例といえる日置謙の諸著作及び梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』を取り上げ、金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵の資料調査をもとに、将軍・大御所の加賀藩邸への御成の評価から検証することを試みた。その結果、日置謙編の『加賀藩史料』には多くの能番組を含む御成記録が掲載され、『金沢の能楽』の記述の根拠となっていること、しかし日置謙編の『石川県史』は地元の歴史を記述する目的のために、江戸の藩邸の催能までは視野に入れていないこと、加越能文庫の資料には『石川県史』『金沢の能楽』両者の能楽史記述には未利用の御成記録が少なくないこと、それらとの照合により相当数の誤刻・誤植が訂正できること、御成記録自体が書写の過程で多くの異伝を派生したこと、などが明らかになった。加賀藩能楽史という地方能楽史を完結させるには、江戸や京都の藩邸催能への目配りが欠かせない。そして同時に、藩邸という江戸における「地方」の催能に、当時第一線で活躍する江戸や上方の役者たちが動員されている事実が「中央」の能楽史記述を補完することは、今後さらに注目されてよいと考えられる。また、従来の地方能楽史が、ここで例とした『加賀藩史料』のような史料集に依存して、その正確さの吟味や周辺資料への視野の拡大を怠りがちであったことも反省される。同一の記録のように見える御成記録も、網羅的に比較してみると、地方能楽史の空白を埋める資料が紛れ込んでいることに気づけるし、御成記録の分類とは別の分類、藩主の年譜などにも、御成能・後宴能の番組が併載されていることがあり、未活用資料の発掘は継続的な作業が必要であると思われる。なお、この問題は能楽学会大会（2008）で口頭発表を行い、学会誌に論文が掲載されている。

能楽史の基本資料である番組の収集に関しては、戦後の「白山比咩神社奉願謡番組」及び明治維新前後の番組10点（和泉流狂言師置屋九郎兵衛宅での能三番・狂言三番の工業番組など）を入手した。どれも近現代能楽史の地方展開の跡をたどる上で有益な資料であると考えられる。また、宝生紫雪ほか能

楽関係者の菩提寺、金沢東山の全性寺の御協力のもと、位牌・墓石等の写真撮影を行うと共に、寺の過去帳を調査された諸橋権之進家の子孫の方から情報提供をいただき、権之進以前と以後の相馬家系図や活動ぶりを知る手がかりが得られた。金沢の能楽としては、泉鏡花及びその作品との関係の解明を進める過程で『卯辰山開拓録』に注目し、とくに豊国神社境内に今も残る「業平の井筒」についての記載を確認し、さらに『浪華百事談』（明治28年）所掲『落穂集』に在原寺の「井筒」を買い取った稲寺某・豊竹越前らが結局は持ちきれず、「井筒」が転々とした話が掲載されていることから、金沢における「井筒」の変遷もこれと類似する例であることが分かった。

地域別の研究では、新潟県の県史・市町村史における能楽史記述を調査し、振作能「兼統」に見られる地域振興との関係を考察したが、新作能とは別に直江兼統の養子となった本多政重をシテとする番外曲「直江」の存在に光を当てる講演を行った（「越後の能楽、能楽の越後」於新潟県立歴史博物館）。続いて、富山市能楽堂・高岡市青年の家能舞台を訪問し、その沿革や施設利用の実態について聞き取り調査を行った。さらに、神戸市・大阪市・豊中市・堺市の神社等における舞台の変遷の調査を行った。これらの調査を通して、とくに最近の数年に少子高齢化の影響が顕著となり、施設の利用が減少している事実がどこでもはっきりと把握された。そういう継承・保存の危機を、過去にどう克服してきたか、改めてその視点から能楽雑誌や地方自治体史の記述を見直す必要を再認識した。

本研究計画の最終年度には泉鏡花の作品『歌行燈』に関して、金沢市の泉鏡花記念館及び金沢能楽美術館と連携して、共同企画・開催により「鏡花と能楽」の諸行事に参加した。その成果は「『歌行燈』を能楽で読む」という論文を含む『金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書』第10集を編集するという形で公開した。この報告書には、泉鏡花記念館及び金沢能楽美術館の展示解説をそれぞれの館の学芸員に執筆してもらい、貴重な展示資料の一つ一つと全体の概要が分かりやすく把握できる点で多くの研究者・愛好者に有益な解説となり得ているし、拙稿を含む三人の関連論考はいずれも今後の「鏡花と能楽」の研究にとって出発点となる水準を示したものと自負している。

拙稿に関しては、時代は「近代」が中心ではあるが、東京・金沢・名古屋・伊勢等の諸地域の能楽史と関わる作品であり、作品の背景を当時の能楽雑誌や新聞記事と照合して、従来のモデル論の検証だけではない、多くの新見を打ち出すことができたと考えている。

具体的には作品の舞台の一つ、伊勢の山田

の能楽界の作品成立時の状況を、雑誌『能楽』の記事で確認し、作中人物の侯爵津の守には当時の尾張徳川家の能楽への打ち込みぶりが投影していること、同じく作中人物の七十八歳の小鼓名人雪叟には作品成立時に七十八歳の小鼓名人であった三須錦吾の投影が明らかであること、瀬尾要・宝生九郎・松本金太郎ら実在能楽師と作中人物との関係を雑誌・新聞等の記事に基づき再整理したこと、鏡花が能「海人」を見た可能性のある舞台を指摘したこと、鏡花による「海人」の作品への利用について、玉の段をお三重が舞い、源三郎と喜多八が謡い、雪叟と桑名の自然が囃すという奇跡の舞台が実現しているところは、玉の段より「海人」の後場が取り込まれていること、喜多八が宗山の影を引き敷く結末は、その影から喜多八が解放されたのではなく、再び宗山を退治するのではなく、喜多八は謡いたい自分のために謡うのであること、明治27年の「能楽規約書」に照らして、登場人物たちが能楽師の規範を逸脱して覚悟の至芸を交響させた結末であることなどを明らかにしたことが収穫である。

また、行事の中で鏡花研究者である吉田昌志氏と対談を行い、「鏡花と能楽」の研究にとって何が今後の課題かを明確にできたことは、「鏡花」と「能楽」のそれぞれの分野の研究にとって意義のあることであつた。刊行したばかりであるので反響はこれから徐々に伝わってくると思われる。

今後は、『歌行燈』のモデル論の検証を通して整理した宝生流の中核人物たちの活動を歴史的に、また地方展開を視野に入れながらより正確・精緻にしてゆくこと、歴史的研究と文学作品の研究の融合を『歌行燈』だけでなく、鏡花の他の作品や三島由紀夫の『近代能楽集』など現代文学作品にも拡大してゆくこと、狂言に関しては和泉流狂言史の流れを金沢と名古屋で比較するという試みを平成22年12月に東京文化財研究所との共同で公開講座を開催したが（現在、その報告書を執筆・編集中である）、その時のように実演の比較を交えて、また地域を絞った比較を行い、それぞれの特徴を明らかにすることを試みたいこと、人物（役者）も地域間の交流を盛んに行った人物に絞り込んだ、しかしなるべく多くの該当者を探して、また資料的裏付けのある追跡を行いたいこと、そして番組類を中心とする資料収集や各地の能楽関連施設の訪問、聞き取り調査を継続して、現代能楽史の重要課題である普及・振興の実態や行方について解明や提言の集積を継続して実施してゆくことを目指したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 11 件)

- ① 西村聡, 『歌行燈』を能楽で読む, 金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書, 10 集(2011), 13-39, 査読無
- ② 西村聡, 文禄三年の能楽事情と『太閤記』—〈高野参詣〉の上演をめぐる一考察—, 金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇, 2 号 (2010), 1—9, 査読無
- ③ 西村聡, 宗教劇から人間劇へ—鬼を救い生を語る能の流れ—, 国文学解釈と鑑賞, 74 卷 10 号 (2009), 101—112, 査読無
- ④ 西村聡, 加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組—前田家三代利常治藩期を中心に—, 能と狂言, 7 号 (2009), 31—37, 査読無
- ⑤ 西村聡, 元和・寛永期加賀藩邸御成能番組集成—加越能文庫蔵御成記録を主として—, 金沢大学国語国文, 34 号 (2009), 188—195, 査読無
- ⑥ 西村聡, 〈綾鼓〉研究の現在—「元雅新作」は〈恋重荷〉を超えたか—, 金沢大学文学部論集言語・文学篇, 28 号 (2008), 37—50, 査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

- ① 西村聡, 加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組—三代前田利常治藩期を中心に—, 第 7 回能楽学会大会, 2008 年 5 月 18 日, 早稲田大学(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 聡 (NISHIMURA SATOSHI)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 00131269